

2014年度乳価 「最低限は確保」「増産意欲へ不十分」 十勝の酪農家

2014年4月9日

今年度の乳価交渉が生乳1㍑当たり3円9銭上げでまとまったことについて、十勝の酪農家からは「最低限は確保できた」と評価する声がある一方、「増産につなげるには不十分」との指摘もある。酪農家の離農が止まらず生乳生産量が落ち込む中、乳価値上げが生乳増産につながり、乳製品の需要を満たせるかが注目される。

ホクレン支所別 生乳受託量		
2013年度速報値		
支所(地区)	生乳受託量	前年度比
帯広(十勝)	107万6239トン	100.0%
中標津	79万1020トン	96.6%
北見	56万1852トン	98.9%
釧路	52万7859トン	97.9%
稚内	28万2988トン	98.6%
旭川	17万2078トン	97.7%
留萌	11万1637トン	96.3%
苫小牧	8万7440トン	96.9%
函館	7万8452トン	97.2%
倶知安	2万3316トン	96.5%
岩見沢	2万3157トン	94.9%
札幌	2万2808トン	97.2%
合計	375万8845トン	98.3%

芽室町で乳牛約110頭を飼育する酪農家の鈴木進さんは「最低限の上げ幅。合格点は付けられない。何とか続けられるという価格だ」と話す。

世界的な穀物高や円安で、輸入に頼る配合飼料価格は昨年から過去最高水準に高騰し、酪農家の経営を圧迫。道内では年間200戸が離農し、2013年度の生乳生産は十勝以外の地域は前年比マイナスに落ち込んだ。

アジアなど世界的な乳製品の需要増で、乳業メーカーは国内の増産を求める。しかし、乳牛2300頭を飼養するドリームヒル（上士幌町）の小椋幸男社長は「3円9銭

では増産へのメッセージには足りない。乳製品が足りなくなつて市場を失うのは避けたい」と危惧する。

同社も加入し、独自に乳価値上げを要望してきた十勝酪農法人会（33戸）の湯浅佳春会長（友夢牧場社長＝新得町）は「チーズ向けの値上げが大きかったことは評価したい」と話す。

チーズ向け乳価は他用途向けより安い。乳業メーカーが輸入品の値上がりで国内のチーズ向け生乳の購入を増やしているため、乳価は上がっているのに酪農家の手取りが逆に前年より下がる現象も生じていた。

近年、新年度前に決まるはずの乳価は難航して遅れる傾向だったが、今回は飲用向け以外を先に決定する異例の対応。湯浅会長は「早期決定したことは評価したい」としつつ、「税抜きで5円は上げてほしかった。酪農家が投資して増産しようという意欲にはつながらない」とみる。

自らも酪農家の多田智己A忠類組合長は「何とか一息つけるくらいの価格」と評価。止まらない離農については「構造的な問題。法人化などで、酪農家も休みを十分取れるようにするなど対応しなければ」と指摘する。法人会が独自の要望活動をしたことについて、「農協は個人経営を中心に考えてきた。しかし、特に酪農では大型法人も大事にしてしっかり意見を聞かなければならない」と話している。

育成牛組織が協議会 酪農効率化へ

2014年4月29日

十勝の乳牛の哺育・育成牛受託組織の有志が集まり、経営情報の交換や技術向上を目指す協議会を設立する。酪農の大規模化が進む中で、外部に子牛を委託する哺育・育成の役割が増しており、酪農全体の効率化で乳量・生産額の向上につなげる。30日に十勝総合振興局で設立総会を開く。

28日現在で8組織が参加を予定している。十勝管内で哺育・育成牛受託組織の団体ができるのは初めて。

乳牛は出産して搾乳できるようになるまで約2年間、哺育・育成することが必要になる。十勝農協連によると、十勝管内の育成農家は13年末で個人が133戸、法人経営が16戸。帯広市の八千代公共育成牧場など公社による運営もある。

搾乳できない育成牛を酪農家が飼うことは経営の負担

になることもあり、外部委託でまとめて飼育する手法が広がっていることから、法人は年々増えている。

協議会は法人、組合など組織での経営を対象とする。酪農家への「より安全・より健康な育成牛の提供」をテーマに、運営・経営の情報交換や受託技術を向上させる研修と情報発信で、十勝の酪農生産に貢献することを目指す。各組織が抱える課題も共有し、解決を図る。

設立世話人代表を務める「シー・ブライト」（豊頃町）の桐山靖朗代表は「酪農が規模拡大する中で、哺育・育成牛受託組織が増えてきた。飼料高騰など経営が厳しい中で、哺育・育成を組織に委託することでコストを削減できる。協議会で技術交流し、課題を整理していきたい」と話している。